

# 学園便り

遊楽部学園  
自治会

## 病院の現状

総婦長 藤谷智子  
二月十日



医師の  
充足率六十  
%も満たな  
い状況の中  
で、派遣医  
師も経費負  
担増とな  
り、医師、  
看護師一丸  
となり、頑  
張っているが経営環境が一段と厳しくなっている。

赤字は町負担となつてきているが自助努力は限界に達している。今から三十年ほど前高度成長の時代、医者は儲かる、病院は儲かる時代がありましたが、今は病院の七十%は赤字、病棟の閉鎖や統廃合が続出して、地域の医療はもう完全に崩壊していると言つていいでしょう。

人材が都市に集中し、田舎に残るのは高齢者ばかり、国民皆保険制度が世界一の長寿国に君臨して来た日本は過去のものに成るかも知れない。何時でも何処でも好きな病院にかかるといえる現在の制度では、職員一人一人の最大限の努力が大切、町職員という意識がやもするとお役所的対応に陥つていないか。民間病院と比較してまだ改善の余地はないのか、細部に渡つて検証すべきではないか。赤字だからと云つて何時までも補填していると肝心の

本体が参つてしまつては元の木阿弥である。町民の健康を守る医療機関が問題をすべて公開し、町民と大いに議論のすえ早急に道筋を決める段階にきているのではないだろうか。藤谷氏の講演を聴いて考えさせられました。新垣記

## 学園長講話

清水教育長  
二月十七日



したがそれでも渡島管内では函館市に次ぐ多さである。特に小学校では腹式校が多いため毎年一、二校が閉校になつていくが、地域住民から見れば廃校は避けたいところだが、父兄にしてみれば教育上やむなしと云うことで理解されている。数億円かけて折角校舎新築したにも拘わらず僅か十数年で廃校、何と勿体ない話である。過疎化の波が辺地に押し寄せ更に少子化が拍車をかけてしまつたのだらう。それにしても時代の変化が急速過ぎるのか、十年先も見通せないとお粗末しすぎる。ある学校では生徒二十人に職員が用務員を含めて九人もいる、さぞ立派な教育が出来ている事だらう。

敗戦時、教材と言えは紙と鉛筆、消しゴムくらい、教科書は兄弟や先輩から譲り受けたもの、それでも先生は親切丁寧に教えてくれた。決して不足という概念はなかった。決して新年度から中学校では日本武道が必須科目になる。体力向上と礼儀を教える、今の子供はそんなにひ弱になつてしまつたのだらうか。お金が無いと教育出来ない、進学出来ない、就職出来ない、それで将来が決まつてしまふ。苦学して勉強すると言葉はもう死語になつてしまつた。未だに給食費を払わない親がいるが、その子供が親の姿を見てどんな大人に成長して行くのか未恐ろしくなる。八雲は尾張藩士が開拓、質素儉約をモットーにして、悪く云えばケチの精神でこの町を發展させてきた。町財政緊迫の折、一方では無駄は無がいと云うがあらゆる観点から見直し

## 高齢者ふれあい演芸会



二月十八日熊石青少年スポーツセンターで第二十一回高齢者ふれあい演芸会が開催されました。今まで八老連のみに参加でしたが今年から初めて遊楽部学園の参加が認められ五人出席しました。会場は百六十名以上の観客で熱



石老連会長寺谷修躰さんの歓迎の挨拶、相沼保育園の漁り火太鼓から始まり、歌、踊りら二十二種目、二時間に渡って演芸が繰り広げられました。八老連からも二組、遊楽部学園からは秋葉愛子さんが美空ひばりの竜馬残影を熱唱、観衆より万雷の拍手を浴びていました。

### 終戦記念日に想う(その二)



河原忠義 八月十五日に私は、中国大陸第一の大河、揚子江の胃袋の様な形の洞庭湖を南下して、湖南省の省都長沙市で聯隊本部の北上移駐に備えて、通信網設置の真っ最中でした。

私達は方面軍直属の通信兵だけに、正午に重大放送の有ることだけは了解済みでしたが、内容については後刻上官から伝達のあるものとして、大して気にもせず作業を続行しておりました。

その晩の点呼に中隊長から直々の伝達で、本日正午に天皇陛下からの停戦詔書の発表があり、日本は連合国に無

条件降伏をしたことを知らされました。この様なとき一番先に脳裏に閃くのは、やはり家族のことで十九年四月に北京出發以来、音信不通の母や妹の安否ですが、果たして此の俺が無事で、何時日本の土を踏めるかが一番気がかりでした。

此の作文のペンを執ったのは、TVで正午の戦没者追悼式典で両手を合せて黙祷した後だけに、往時を語り合う者もなく、唯独り回想に耽り居ります。日本の敗戦を知らされたあの時、母国と何kmも離れ、何年も音信不通の家族がいるだけに不安だらけでしたが、今にして満州や南方に派遣されてなくて、偶然にも中国中部の温暖の地での捕虜生活だっただけに、終戦から一年を待たずに、然も元気で無事復員出来たことは何よりも幸運だったと云わざるを得ません。

料の販売に挑戦したのでした。更に郷土にあつては若い時からボランティア的な公職や、自治活動に率先して精励してきており、自分で自分の事をよくぞ戦中、戦後とお国の為に郷土の為に献身したなと自己満足しております。

私は私が無事我が家に復員した日を、私の第二誕生日と云っており、今年で六十五回目を迎えたことになりました。従軍した六年間は民族と国家の安泰を願うての辛苦そのものでしたが、復員しても安堵の暇もなく、食糧難から初めての、慣れぬ農作業に励んだり、生活の糧を得るべく何か適当な仕事がないかと、新聞、燃

### 編集後記

今年には暖冬の予想を覆し、大寒波、大雪に見舞われ、毎日除雪排雪に疲労困憊です。三月になると寒さが段々緩み積もった雪が溶けて早く春が来るのが待ち遠しいです。

学園便りは会員みなさまのご協力により早くも三十五号になりました。色々な想いが詰まった記事を読み返すと懐かしく想い出され反省材料にもなります。書くことは大変ですが心が籠もつていけば、拙文であつてもその意図は充分に伝わるものです。写真やイラストを入れるのも百聞は一見に如かずで目と頭の休養になればと思ひ、紙面が余分になります。敢えて載せています。平成二十四年度は遊楽部学園が開設四十周年になります。先日の役員会において、開講式に合せて挙行することが大筋で決まりました。

平成二十四年度は遊楽部学園が開設四十周年になります。先日の役員会において、開講式に合せて挙行することが大筋で決まりました。時間が無く準備不足で難しいのではないかと意見もありましたが、三十周年時の経験者が多数おりますので皆さんの意見を聞きながら進めて行きたいと思ひます。今後役員の皆様には大変なご苦労を掛けると思ひますが、ご協力のほどお願い申し上げます。さる一月二十日の映画鑑賞では、五音放送六十六年目の真実(平成二十三年八月十四日エフエフ放送)を見ました。ポツダム宣言を受け入れるべく御前会議では受け入派と強行に国体護持を主張する一部軍部と対立、天皇陛下の御聖断により国民へ終戦を宣言したのであるが、その原文を巡り、何回も趣旨推敲され昭和天皇の人間性を浮き彫りにした。

あくまで終戦を阻止しようとした一部青年将校が近衛兵を巻き込みクーデターが勃発、その渦中にいたのが元近衛兵近藤国太郎氏であつた。日本の命運をかけた戦いが国民の知らない中枢部で命をかけて実行された。現在は近衛兵の生き残りが全国で十数名しかいないなかでテレビ画面では一分程のインタビューでしたが、学園便りにその当時の状況等の寄稿をお願いしたところ、今まで老連便りにも載せていない部分もあり、貴重な原稿を頂きました。

近藤氏は現在九十二才、これで私の最後の遺言になるかも知れないと悲痛に話しておられました。之を機会に、高見貞子さんの想い出も合わせて次号に全て掲載します。お楽しみに。山田記